

## 「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 2年 立石和奏

このフィリピン研修は、8日間という短い期間ではあったが、とても密度の濃い時間で、私は自分の価値観やあり方について考える大切な機会を得ることができた。

フィリピンでの主なプログラム内容は、フィリピン人の国際結婚について統括している政府機関 Commission of Filipino Overseas (CFO) や Japanese Filipino Children (JFC) にまつわる問題にかかわっている NGO 団体、かつてフィリピンから日本へやってきたエンターテイナーに携わった様々な職種の人々、日本語学校、福祉施設、アニメ学校・会社などを訪れるというものだった。訪れたどの施設もお話を伺ったどの人もインパクトが強かったが中でも特に印象に残っているのは、今回非常に親切にアクティビティの予定を組んで下さった、元プロモーター（フィリピンからのエンターテイナーと日本での勤め先の仲介者）の方のお話である。フィリピンから日本に来るエンターテイナーはビザを用いて渡来するので、政治的な事情も大きく絡んでいる。今回引率して下さった安里先生の講義の中で、ビザの話は聞いたことがあったが、日本側の入国管理局や厚生労働省意外にも、在日フィリピン大使館やフィリピン側の政府機関など様々な機関がフィリピンから日本の移民（結婚移民やエンターテイナー、その他労働者）に関わっており、事態は私が想像していたよりも大きく複雑であった。また、政治には必ず裏の側面がつきもので、私たちが文書や政策で分かることとは別の動きや思惑も背景にあった。それらの話がどこまで本当かどうかというのは判断できない上に、事実の一つでもそれに対する見方や考えは同じとは限らない。しかし、ここで私が大きく学んだことは、人は、特にこのように大きなビジネスで成功したり政治的に重要な職に就いていたりする人は、みな各々の「真実」や「信念」をもって生きている、ということだ。「絶対に良いこと」も「絶対に悪いこと」もなく、どんな政策や思想や行動にも良い面も悪い面もつきもので、そのうえで人は自分の信念に基づいて何らかを選択している。そしてその積み重ねがその人の生き様になっている、ということが、フィリピンでインタビューをした人々からはひしひしと感じられた。私は、まだ知識も浅く、経験もなく、様々な立場の人の話を聞いて自分の中に落とし込むだけで精いっぱい、そこで自分がどう思うか、ということまで行きつくことができなかつたが、これから時間をかけて、自分が何を信じて何を選択するのかということを探していきたい。もう一つ学んだ大切なことは、世の中には自分の利益を最優先するような人も存在しているということだ。私は自分の利益を優先するのでもた一つ生き方ではあると思うが、だからこそ、出会う人がどういう人かを鋭く見極め、自分が誰と付き合っていくのかを慎重に判断しなければ、危険な目や辛い目に遭うかもしれない、と認識することができた。私は、幸いにも、今まで周りにそこまで自分の利益を優先するような人がいなかったのに特に警戒せずのりくらしと生きてきたが、海外に出るということは、今以上に多様な価値観や文化的背景を持った人々と関わることになるので、十分に注意が必要だと分かった。

訪れた施設の中でもう一つ印象的だったのは Hospicio である。そこには、0歳から18歳までの孤児と、高齢者、障害者、隔離が必要な病人が生活していた。日本の介護施設や孤児院に詳しくないので正確な比較はできなかったが、どことなく寂しい雰囲気か漂っていた。施設内を職員の方に案内して頂いたが、1~3歳の子どもたちの部屋を通った時に、2人くらいの女の子が自分から手をつないでくっついてきた。その時に私の中に急に「この子どもたちはこれからどうやって生きていくのだろうか」という疑問となんとも言えない悲しさを感じてしまった。私は普段は障害児の放課後デイサービスでアルバイトをしていて、その中で障害を持った子供たちと関わる際にも時々感じていることだが、大人になって誰も助けてくれる人や支えてくれる人がいなくなった時、この子供たちは一人で生きていけるのだろうか、と考えてしまった。同時に、一時的でたったわずかの支援しかできない自分の無力さにも痛感させられた。しかし、後の安里先生の話の中で、「社会問題の前線に立つということは時には強い波風にさらされることもあるが、私たちはどこかで、そこでかかわる人々から生きるエネルギーをもらっていて、だからこそ向き合い続けることができる。だからゆるゆる考えてください。」というお言葉があった。この言葉が私の中でとても響き、確かに今の私にできることは孤児たちや障害者などの支援が必要な方の人生の中ではほんのわずかなものでしかないかもしれないが、それがその人たちの元気や将来に活かせる力のかけらになるように彼らと携わっていこう、と思うことができ、「支援」というものについて、もう一度考えさせられる機会を得た。私は、来年からは地理学専修の配属を希望しており、今回のフィリピン研修で得た知識は私のこれからの研究に直接かかわることはないかもしれないが、フィリピンで学んだこと、感じたことは私を内面的に大きく成長させてくれた気がする。こんな経験ができるからこそ、色々な人と出会い、価値観を共有したいと思ったし、さらなる海外留学への決心も固まった。その意味でも、今回のプログラムの参加は非常に有意義なものであった。また、このような経験ができたのも、すべて安里先生や、たくさんの協力者のお力添えがあつてのことで、本当にたくさんの人に支えていただいて自分が学ぶことができていることを改めて感じた。

最後になりましたが、引率して下さった安里先生、手続き・準備をして下さった文学研究科国際交流推進室様、その他このプログラムに携わって下さったすべての方々へ厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。